

〈2022 年度〉

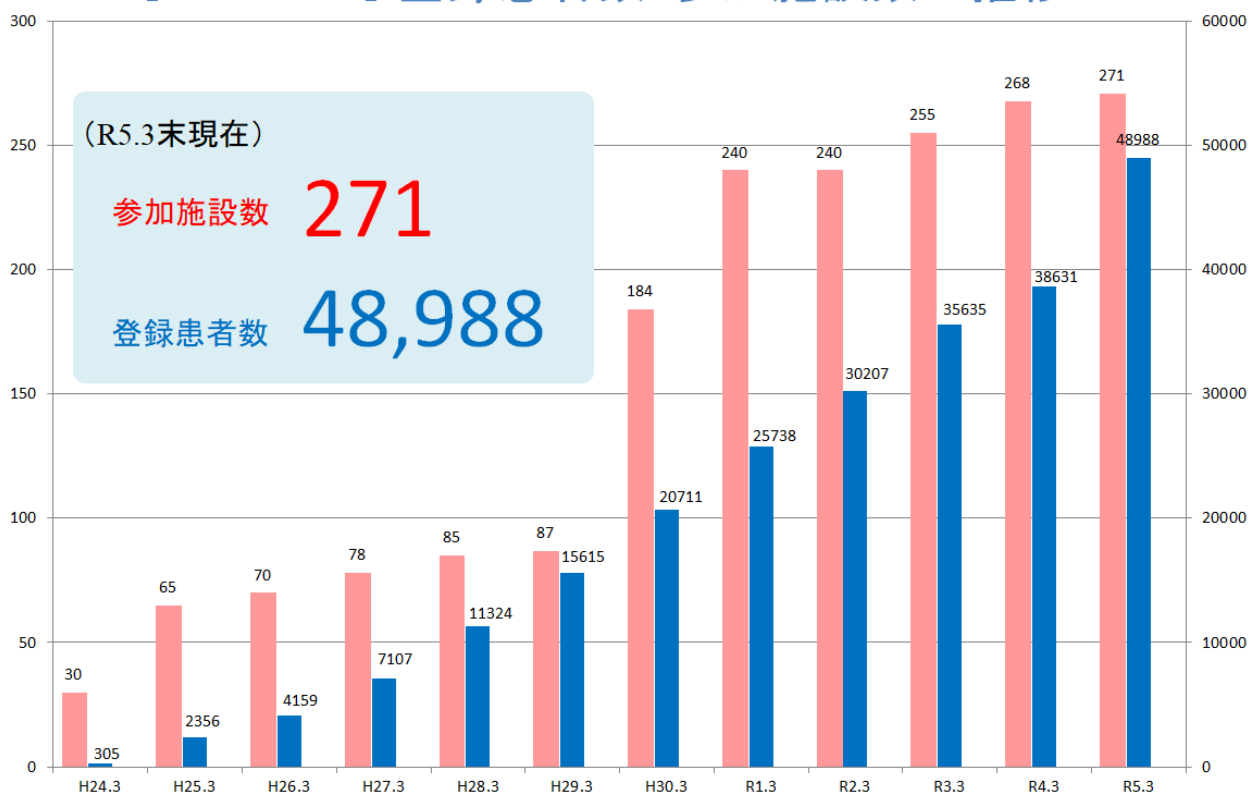
ism-Link の検証

南信州在宅医療・介護連携推進協議会
飯田下伊那診療情報連携システム運営小委員会

医療と介護の連携において、円滑な情報共有は重要な課題の一つとなっている。飯田下伊那診療情報連携システム（ism-Link）は、2009年度に導入され、2011年12月に情報開示6病院を中心に運用を開始した。その後、システム更新を機に、2016年4月に南信州広域連合に事務局を設置し、南信州在宅医療・介護連携推進協議会の飯田下伊那診療情報連携システム運営小委員会において運用方法等の検討を行っている。その中で、ism-Linkが当地域の医療・介護連携における「情報インフラ」として適切なシステムであるかどうかを検討するため、定期的にism-Linkの利活用の状況、医療・介護連携における効果等について検証作業を実施している。

	項目	検証に必要な主要データ	詳細
1	基本事項	参加医療・介護関係事業者数	<ul style="list-style-type: none"> ・地域全体の医療・介護関係事業者数把握（資源把握） ・参加事業者数集計（全体/業種別） ・参加率（地域全体/業種別）
2	基本事項	ism-Linkに同意した住民の数	<ul style="list-style-type: none"> ・地域全体の登録患者数
3	病病連携	病院間連携での閲覧状況	<ul style="list-style-type: none"> ・病院間アクセス件数 ・地域連携パスにおけるism-Linkでの連携 ・その他転院時におけるism-Linkでの連携
4	病診連携	病診間連携での閲覧状況	<ul style="list-style-type: none"> ・病⇒診アクセス件数 ・診⇒病アクセス件数 ・がん地域連携パスにおけるism-Linkでの連携
5	多職種連携	医療介護連携での閲覧状況	<ul style="list-style-type: none"> ・連携シート作成数に対するism-Link登録患者 ・診病介間アクセス件数
6	情報共有項目	項目別閲覧状況	各項目 ^{※1} のアクセス件数 ※1 画像・検査・注射・処方・レポート・ファイル・ノート

[ism-Link] 登録患者数・参加施設数の推移



2023.3 末

施設	地域施設数	参加施設数	参加率
病院	9	9	100%
診療所	103	71	69%
歯科診療所	77	23	30%
調剤薬局	68	64	94%
訪問看護ステーション	14	13	93%
介護関係事業所 (行政含む)	131	91	69%
合計	402	271	67%

検証項目 3～6

(1) アクセス件数の年次推移

図1 施設別アクセス件数の年次推移

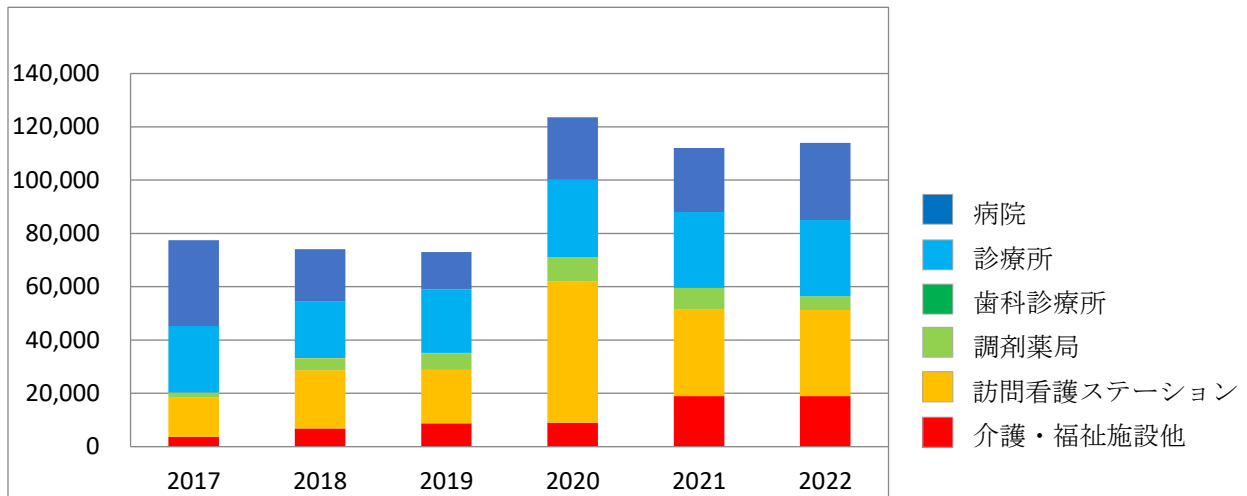


図2 職種別アクセス件数の年次推移

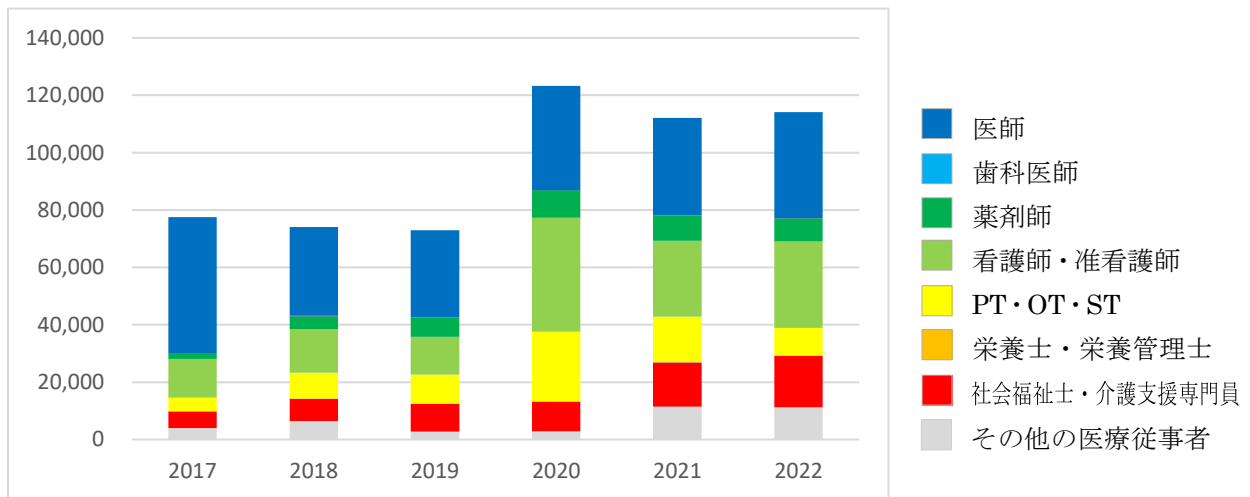
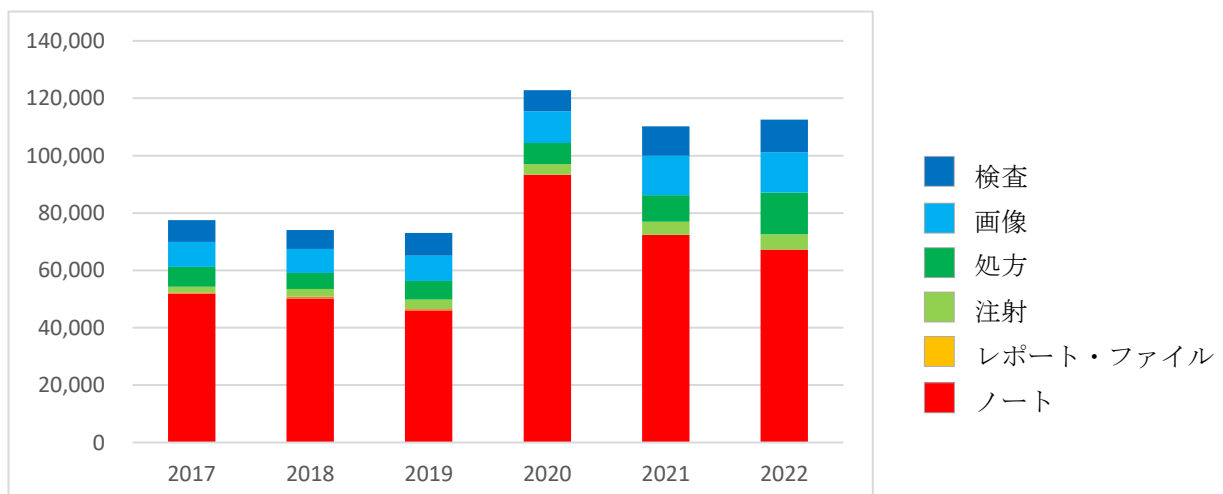


図3 項目別アクセス件数の年次推移



(2) 施設別のアクセス状況

図 4 病院の参照先・参照項目

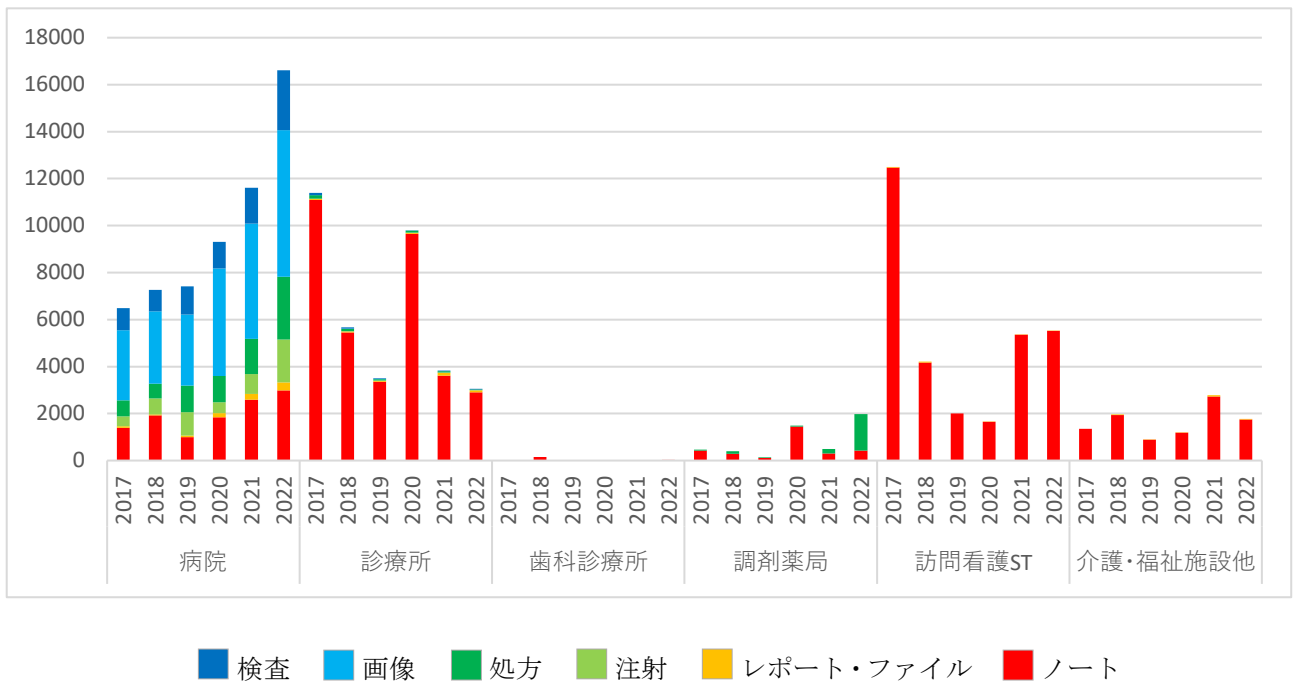


図 5 診療所の参照先・参照項目

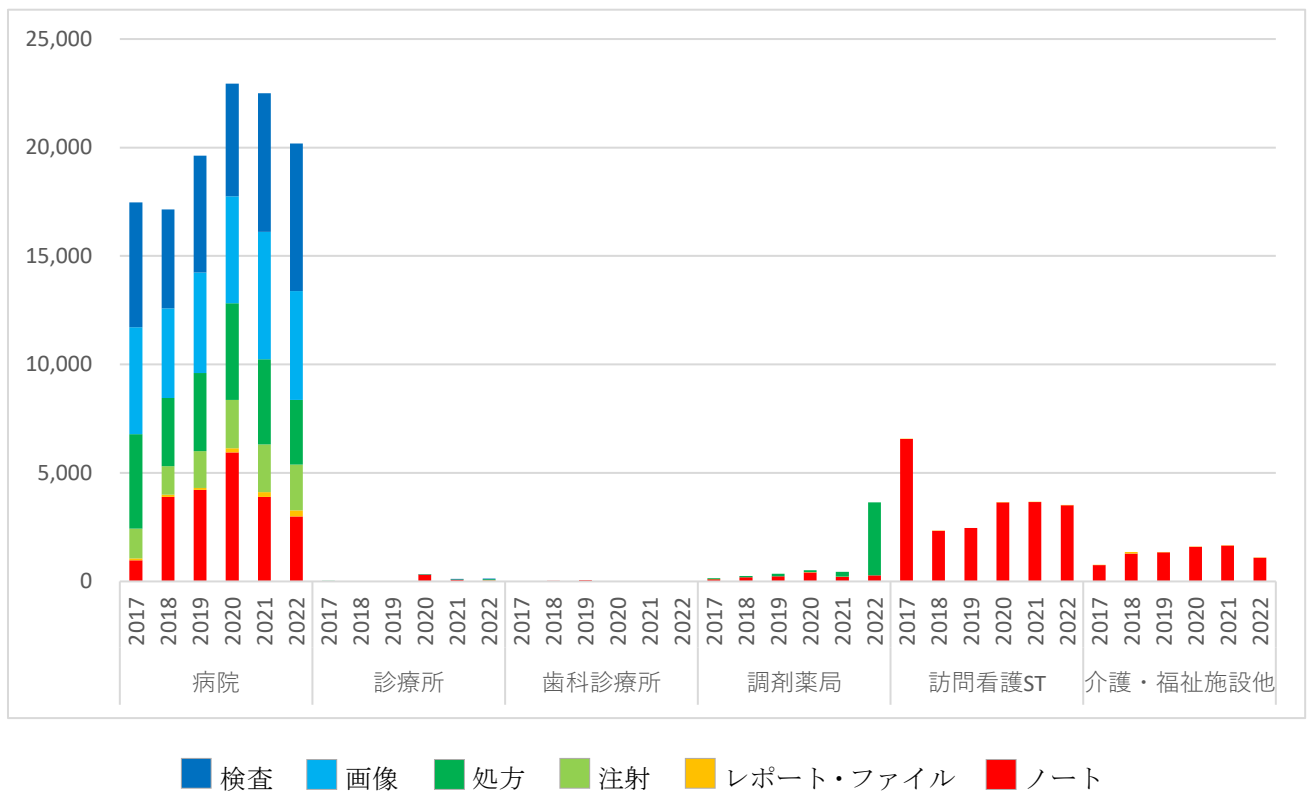
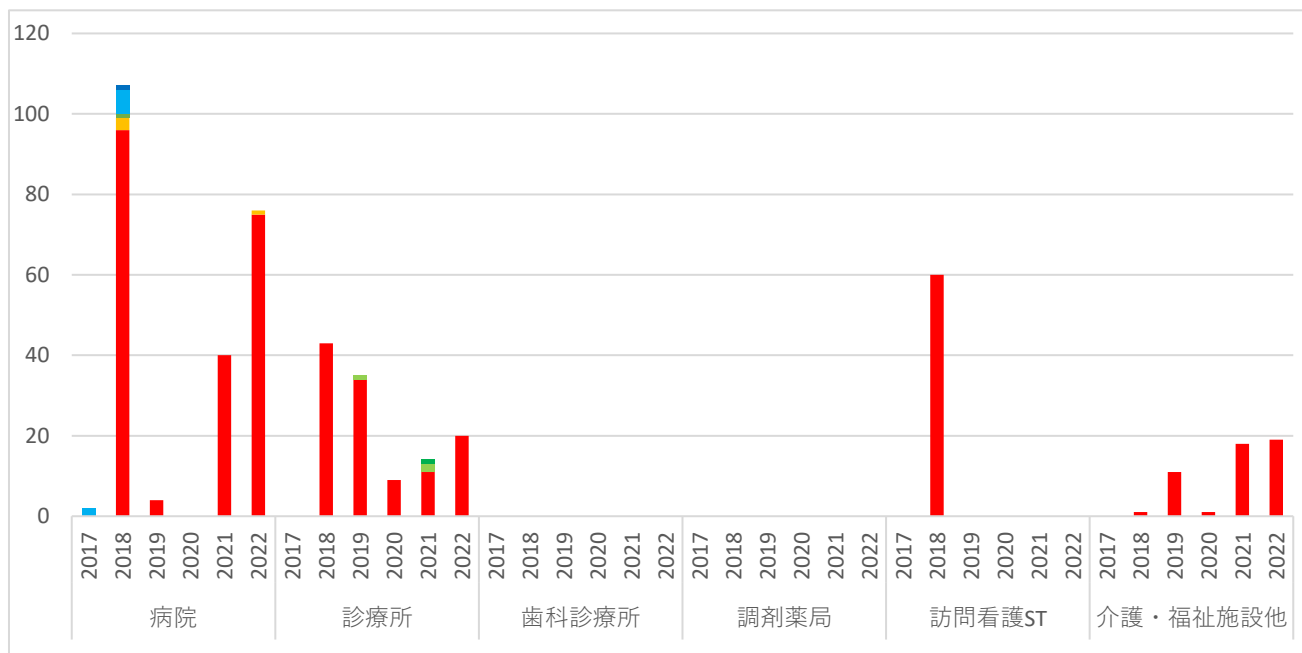
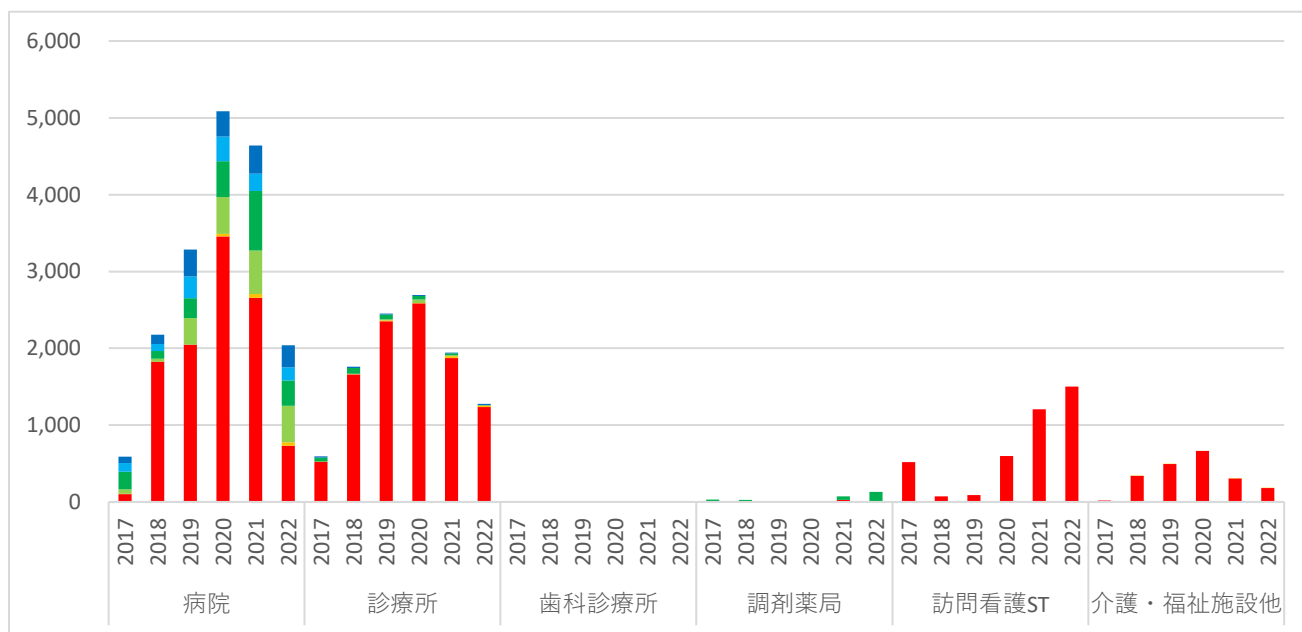


図 6 歯科診療所の参照先・参照項目



■ 検査 ■ 画像 ■ 処方 ■ 注射 ■ レポート・ファイル ■ ノート

図 7 調剤薬局の参照先・参照項目



■ 検査 ■ 画像 ■ 処方 ■ 注射 ■ レポート・ファイル ■ ノート

図8 訪問看護ステーションの参照先・参照項目

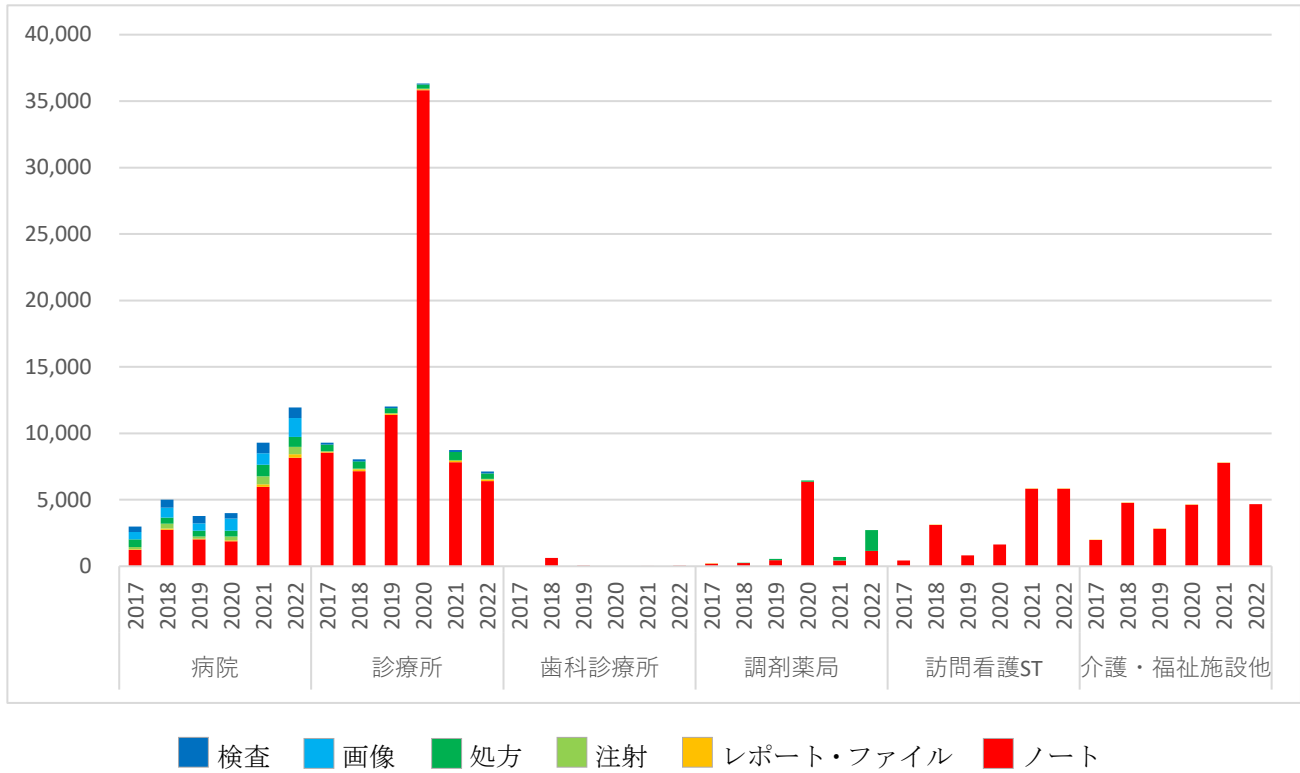
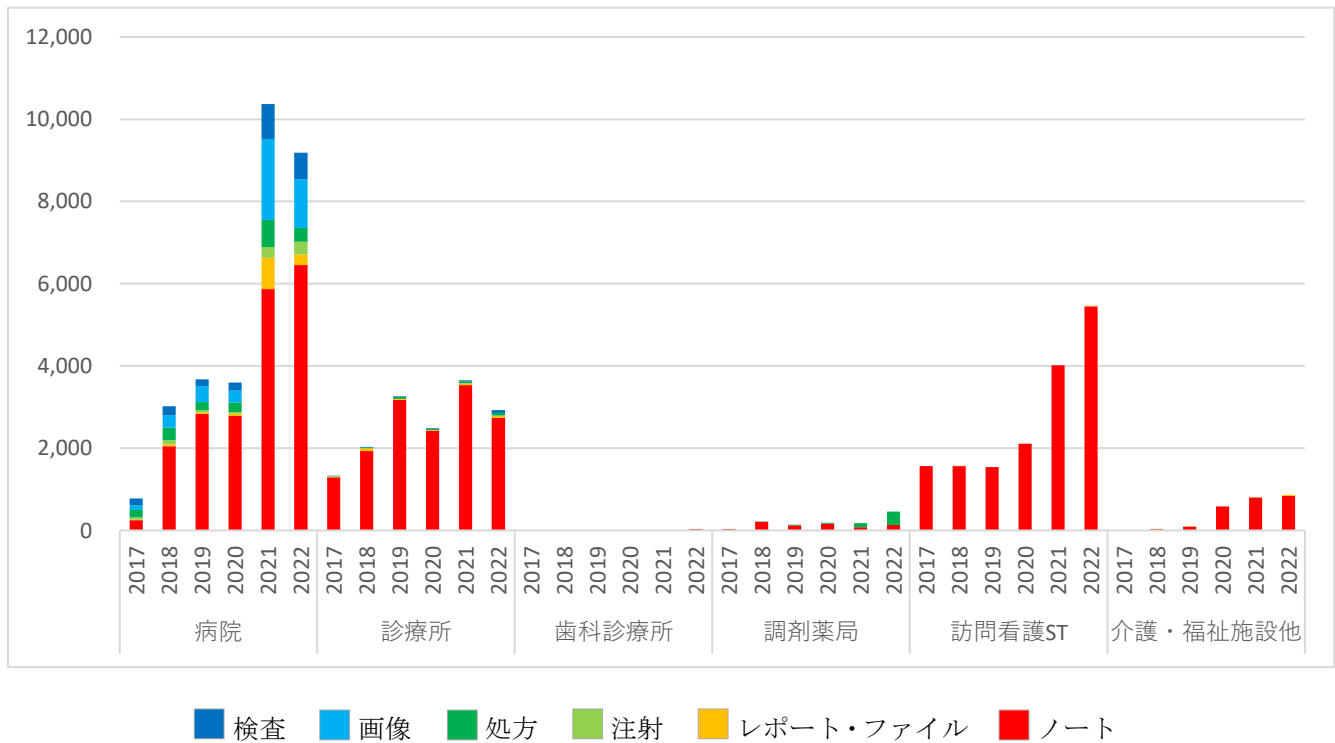


図9 介護・福祉施設の参照先・参照項目



アクセスログの解析結果

(1) アクセス件数の年次推移

2017年度から2019年度は70,000件台で横ばいとなっていたが、2020年度は120,000件台にアクセス件数が大幅に増え、2021年度以降も110,000件台と安定的にアクセス件数を伸ばしている。また、2020年度以降、病院、訪問看護ステーション、介護・福祉施設でアクセス件数の増加が目立つ。(図1)

2017年度までは医師のアクセスが全体の60%以上を占めていたが、同年に南信州在宅医療・介護連携推進協議会において多職種への参加が承認されことにより他職種が数値を伸ばし、2020年度以降では対照的に医師以外の職種の参照が70%となっている。(図2)

項目別ではノートの参照が59~75%を占めているが、医療情報(検査・画像・処方等)へのアクセス件数が増えており、中でも処方の参照が最も多くなっている。(図3)

(2) 施設別のアクセス状況の解析

病院の総アクセス数は2020年度以降増加している。特に病病間の医療情報の参照は着実に増えており、病院では、ism-Linkは医療機関間の診療情報の共有のための手段の一つとして定着している。また、2022年度は、調剤薬局の処方情報へのアクセス件数の増加が目立つ。(図4)

診療所では主に病院の医療情報の参照に利用されている。また、在宅医療を積極的に行っている診療所では多職種(特に訪問看護)との連携のため利用されている。2022年度は、処方情報について病院へのアクセス件数が減少した一方で、調剤薬局へのアクセス件数が増加した。(図5)

歯科診療所ではism-Linkの利用は進んでいない。(図6)

調剤薬局では特に病院、診療所、訪問看護ステーションとの間のコミュニケーションの手段として利用されており、病院の医療情報も参照されるようになってきた。一方で、ノートの参照は2021年度以降、減少が目立つ。(図7)

訪問看護ステーションは診療所との連携での利用が主体であったが、2020年度以降は病院や介護・福祉施設等との情報共有に利用されている。また、2022年度は、調剤薬局との連携も進んだ。(図8)

介護・福祉施設では主に病院・診療所・訪問看護ステーションのノートの参照に利用されているが、2021年度以降、施設の理学療法士による画像とノートの活用があり、数値を伸ばしている。また、訪問看護ステーションとの連携も伸びている。(図9)

ism-Linkは医療機関間での医療情報の共有、在宅医療での多職種連携のための「情報インフラ」として定着し、利用が進んでいる。